

泰平期の章

編集長って雑巾になること？

編集長は誌面の顔。しかしその顔も結婚やら上京やら転職やらでコロコロ変わった。私をスタートに村山由香里さん、清澄淳子さん、中込房子さん、大木玲子さん、西尾彩子さん、宮之原由紀さん、白井美奈さん、芝尾真理さん、また私、高木康成さん、そしてまたまた、私…。

ガリヤの創業により私に自動的に社長の肩書きがついたことから、

「肩書き、二つも要らないでしょ」

ってことで、編集長の肩書きを村山由香里さんに譲った。二代目編集長の誕生だ。ところがこれが大間違い。譲るべきは社長の肩書きだった。

同じ頃、エルフの山本京子編集長から退職挨拶の電話が入った。

——京子ちゃんもついに結婚ですか？——

「…ま、そろそろですわねえ…」

などとはばし旧交を温めていたところで、

「編集長ってというのは、雑巾になることだったんですね！みんながドロドロドロドロ垂れ流す汚れを、一生懸命拭きとって、拭きとって、拭きとって、ボロボロになることだったんですね！」

彼女の感情が爆発した。エルフに残留し、編集長としての責任を全うする中で溜まりに溜まった鬱憤を、溢れ出るまま私に流し込んできた。

——そうよ雑巾よ、それでも京子ちゃんはよく頑張ったね！偉かったね！——
雑巾のたとえに座布団一枚。大いに共感する私が出た。しかし、上に立つ者の宿命だろう。ボロボロになつて擦り切れるか磨かれて光を放つかは、立ってみなきゃ判らない。

編集長つて文化人？

幸いにも村山編集長は後者だった。人の心をつかんで活かす能力に長けていた。叩きだされた私に半数以上ものスタッフがついて来たというのも彼女あつてのことだ。

面接でのトークは鮮烈に残る。

「私が女ということ、お茶入れとか「ピー」取りばかりさせられています！」

某化粧品メーカーを退職後、福岡市役所でしばらくアルバイトをしていたらしい。ところが公の職場でありながら、与えられる仕事には常に女性フィルターがかかっている。それにビツクリし、矢も盾もたまらず飛び込んで来たという印象だ。とにもかくにも男女格差社会に対する憤りを面接でぶつける人は、後にも先にも彼女ひとりだった。

「こんな仕事、やってられません！」

の捨て台詞でそれまでのスタッフが一斉に去った直後、つまり「広告だらけ誌」に転じて四ヶ月ほど経った頃の入社である。それまでの仲間たちと同じ環境のもと、同じやり方で同じ指示を与えた。しかし彼女は逃げず、むしろパクっと食らいついてくれた。食らいつきながら、

「いったい、いつまで売り上げ上げたら気が済むんですか!?!」
と激怒し、私の机をドンツと叩いたりもしたが（苦笑）

しかし脳ある鷹は爪を隠すよろしく、日頃の彼女はいわゆる癒し系のゆるキャラ。

——田香里ちゃん、ご飯食へに行かない?——

「は〜い、行きますしよ!」

——高岡くん、ゆかりちゃんのこと好きみたいね——

「そ…うですかねえ…」

公私ともに、誰より解り合える相手だった。

ガリヤもようやく一段落と確信し、編集長の肩書きを譲った。そのことで、彼女を見る目が親しい仲間を見る目から、後継者を見る目にシフトした。

傀儡政権

——村山編集長は?——

「グランドホテルです。パーティーに出席されています」
目がテンになった。

——今日は色校なのに、どうしてパーティーですか!?!——

私にはとうてい考えられない事態だった。しかし真の信頼があれば、

——考えられないほど大事な付き合いなのだろう——

こんな解釈の道もあったのだ。ところが

——ガリヤの編集長は文化人ではありません！——

追いつめるような叱り方しかできなかった。

「ガリヤは傀儡政権ですから……」

そんなボヤキが漏れ聞こえるようになった。

編集長職を退いた私が、相も変わらず編集業務にまでガッツリ入り込み続けたのもいけなかった。そんなすれ違いを繰り返すうち、

——田香里ちゃん……——

「……」

呼んでも届かない距離にいた。

アヴァンティイ創刊

村山由香里さんはガリヤ退職早々、アヴァンティイを創刊した。アヴァンティイの中には彼女の求める〈女性の社会的向上〉色が今も色濃く漂っている。

〈福岡県男女共同参画企業賞〉（平成十八年福岡県）、〈女性のチャレンジ賞〉（平成二十年内閣府）など、アヴァンティイの編集を通して懸命に活動を続けてきた彼女の評価は高い。

2010年には片腕として彼女を支え続けた清澄由美子さん（ガリヤ三代目編集長・清澄淳子さんの義姉）に経営を移譲し、〈福岡県男女共同参画センターあすばる〉館長就任…持つて生まれた資質もあつたにせよ、フリーペーパーが生んだ栄えある文化人だ。

これからいっただい何をしてくれるだろう…楽しみみである。

記憶の中の編集長たち

ガリヤ創業から終焉に至るまでになんと十二代を数えた編集長。ポスト。重要ポストでありながらも任期の平均はたったの二年だ。しかし、その時々に応じて持てる力を注ぎ尽くし、様々な理由をもつて退任し、そして次世代へとバトンが渡されていった。

そのひとりひとりが今、数珠つなぎになった宝石に思える…。

三代目編集長・清澄淳子さん…水晶

二夜の貫徹がこたえたのだろう、訪問先で待たされる間、正座の姿勢を崩さぬまま眠っていた。意識を失っても姿勢はキープといった比類なき高尚さが、時に周囲とのズレを感じさせることも。

イラストレーターさんと結婚。出産直前まで勤務して、退職した。

四代目編集長・中込房子さん…翡翠

イメージは編集長というよりガリヤ女子高の校長先生。校則を破る生徒や暴走する生徒たちに常に気を配り、頭を悩ませていたような…。身につけるのは麻などの天然素材のみ、そしてノーメイク。清楚さと実直さを絵に描いたような女性だった。

絵描きさんと結婚後、ニュージールランド行きを理由に退社。

五代目編集長・大木玲子さん…ルビー

愛嬌あふれるふくよか美人のせいか、クライアント人気は絶大だった。努力の人で熱っしやすく、周囲の人間は火傷注意。

ガリヤ編集長とガリヤプラス編集長を経験後、寿退社。

六代目編集長・西尾彩子さん…アクアマリン

物静かで淡々とやりこなすキレ者ながら清楚な美人ときていたから、隠れ男性ファンも多数。

上京を理由に退職。

七代編集長・宮之原由紀さん…エメラルド

長身&日本人離れした顔立ちのバリコレ・モデル風な風貌に、面接時「会場を間違えてませんか？」と質問したほど。一挙手一投足に華があった。

退職理由は意外にも家事都合。

八代編集長・白井美奈さん…サファイア

エルフ時代にいったん留学退職し、結婚、出産の後、ガリヤに復帰。頭の回転速度は神レベル。笑いもとるが、あまりにもスルドすぎて痛かった。ツッコミ芸人として吉本なら大成したはず。

諸事都合により退職。

九代編集長・芝尾真理さん…真珠

残業も多く、新婚妻の家事との両立は不可能に思われたが、ガムシヤラに果たしてくれた。
諸事都合により退職。

十一代編集長・高木康成さん…ガーネット

ガリヤ初の男性編集長。誌面モデルとしてもハダカも辞さぬ活躍が伝説に。経営難、人手不足など様々な難局を共に乗り越え、ガリヤ後継者として大きな期待をかけるまでに至ったが…なぜか退職。

前後するが

二代目編集長・村山由香里さん…ダイヤモンド

ついでながら

一代&十代&十二代目編集長・長澤由起子…宝石たちを繋ぐヒモ&留め金。

ミスの原因は「大丈夫」にあり

先日、村山由香里さんと当時の思い出話に花を咲かせた。

「あの頃は（営業に）行けば契約がとれましたもんね。『これ以上とると制作が大変になるから』って、途中で営業するの止めてましたもん」

——（私はギリギリまでしてたよ！）——

言葉がグツと呑み込んで、笑った。

たしかに制作も大変だった。というのも営業担当者⇨制作担当者であるからして取得契約量が倍ならず制作量も倍。

契約が決まると「取材（打合せ）・撮影コーディネート・デザインプラン・原稿制作・クライアント確認・原稿修正・写植発注・版下発注・クライアント再確認・版下修正・色指示・入稿・色校」などの各種作業がバツクで付いてきた。

大変の極みは入稿作業だ。本来、版下の「文字修正」とか「写真のアタリ貼り」とかは外注の版下業者の役目だが、この段階になると質より量だ。膨大な量の版下を自力で完版（完全版下）に仕上げるといふ、まさに全力疾走のラストスパートである。カラーチャート・級数表・ルーペ・ロットリング・鉄定規・カッターマット・カッター・ピンセット・ノリ・トレーシングペーパー・テープ・12色マー

カー・卓上計算等は各自のデスクの常備品だった。

入稿と同時進行が「読み合わせ」だ。ここでは「マサカ」のミスが発見される。「誤字」「脱字」「ダブリ文字」「誤価格」「誤住所」「誤電話番号」「誤日時」「誤曜日」「誤営業時間」エトセトラ：マサカのわりに出るわ出るわ！ミスが発覚するたび、

「ありがと〜っ!」

感謝の声が轟いた。ミスを見逃したまんま印刷されれば、注ぎ込んできた情熱も愛も汗も誠意も感謝も感動も…消滅する。

ちなみに言い訳のほぼ百分が、

「大丈夫と思つて確認しませんでした…」

おかげで「大丈夫と確信する所にミスあり!」に到達し、

——「大丈夫」との確信力所は「ここにミス在り!」のサインです。いつそうちカラを入れて確認してください!必ずミスが隠れています!——

入稿時における私の常套句となった。

版下修正作業…手も服もノリでベタベタに

数字確認には特に入念さが要る。たとえば262-3269の電話番号が262-3296となつていても目視では見逃し易い。そこで、

「お忙しい時にすみません!ガリヤですが、このたびは広告のご掲載ありがとうございました…」

と、話し終わらないうち、

「忙しい！（ガチャン）」

かかれれば正、かからなきゃ誤、即座に版下修正だ。①カッターで69に切り込みを入れて解体する。②裏にしっかりノリをつけ直し相互の位置をチェンジする…米粒サイズを相手の大仕事だった。

「ダブリ文字」「脱字」には気が遠くなった。たとえば10行の文章中、

「二行目の上から六文字目の「です」が「でです」になっています！」

なんてミスが発覚したとする。そこで「で」の一字削除にとりかかるのだがこれがオオゴト。

①一行目と二行目の行間の中央に鉄定規をシッカリあてる。

②鉄定規に沿いカッターでス〜ッと切り込み、行をバラす。

しかしダブリ文字が1行目とはつくづく運が悪い。そのわずか一字のために、

③10行目までの行間全てに切り込みを入れ、バラす。

④一行目の「です」から「で」をカットして削除する。

すると「で」と空間が発生する。そこで、

⑤「す」以下の文字を行を「で」までスリ上げて詰める。

すると一行目の末尾がポツカリ空く。そのポツカリを埋めるのが2行目・一字目の役目だ。

⑥二行目の一字目をカットして1行目の末尾にペタリ貼る。これで一行目は満たされる。しかし二行目の頭に新たなポツカリ発生。それを埋めるのが3行目・一字目…と、こんなカット&ペーストがエンエン末行まで続くわけだ。当然ながら手はノリでベタベタになる。

印刷所から届いたガリヤを開くなり…

「この行…曲がってませんか？」

—そうね…でもこのくらいなら…判らないんじゃないかな…—

行間曲がり事件は頻発した。版下から外れた修正文字が、他ページで発見されるなんてオソロシイことも、頻発した。

色指示

修正が完了すれば色指示だ。完版（完全版下）をトレペで覆い、カラーチャート片手にY100+M50+C20などと、文字色や背景色を書き込んでいった。ちなみに印刷の基本色はB（黒）M（赤）Y（黄）C（青）の四色から成り、さらに0%〜100%の濃度を持つ。つまり紫でも茶でもピンクでもオレンジでも、この四色の組み合わせで成っている。

袋にセット

ページごとに〈版下・版下コピー紙・ポジフィルム〉をセット。ポジフィルムは1枚つつ透明シートに納め納めて分別シールを貼った。シールにはそれぞれ〈広告名・倍率・配置記号・担当者名・発行号〉が記入され、そして完成となるはずだが…

「○△□屋のコース写真、どなたかご存知無いですか?!」

○サロンの脇脱毛写真が見つかりませ〜ん!」
行方不明ボジの搜索協力も、大事な大事な作業だった。

折り

入稿作業中、制作部が不機嫌になるのは恒例だった。果てしなく節操なく振りかかってくる仲間たちの不手際のいわば尻拭い役。瀬川さんや岩見さんは無口になり、ブチ切れた江坂さんが代表してよく文句をぶつけに来もんだが、〈折り〉が揃えばニコヤカになった。

そう言えば最近、出版に関わりながら〈折り〉を識らない人が増えている。ガリヤのようなA4サイズ・中綴じ（注：ホットペーパーは平綴じ）の場合は〈A1紙〉の表裏に8ページづつ、計16ページがまとめて印刷されるのだが、そのひとかたまりを称して〈折り〉と言っ。

各折りを2回づつ折りたたみ、1折り↓2折り↓3折り…と順に重ねていき、表紙を敷いて中央をホチキスで留める。さらに2つに折って三方をカット（断裁）すれば製本となる。

もちろんページ数が増えるごとに折り数も増えページ組みも変動する。

「5折り表の○○△ページと、6折り裏の△◎ページが、未だ出てませ〜ん、早く出してください!」
「○○△ページはもうすぐ出ます〜すみませ〜ん!」

「△◎ページはちょっと待ってください〜!○○△◎屋のボジが1枚、見つからないんですよ〜!」
こんな声が聞こえてきたせば、ゴールは目前だった。

化粧ハゲハゲのヨレヨレでも 極上の爽快さだった

全ての折りが16ページづつ揃ったところで、それまでの喧騒がウソのように止んだ。祭の後の静けさである。ソロソロ表に出ると東の空がうっすら白んでいる。その壮麗さに〈春はあけぼの やうやう白くなりゆく山ぎは 少し明りて 紫たちたる雲の細くたなびきたる…〉なぜかよく、枕草子の雅な一節が口をついたものだ。

この顔もあの顔も化粧ハゲハゲの寝不足顔だった。しかしこの頃を知る者は口を揃える。

「気持ちよかったですよね」
とにかく、極上の爽快さだった。

Macの登場で入稿作業は激変した。版下と格闘することが無くなり、カラーチャートをルーペで凝視することも無くなり、級数表もロットリングもカッターナイフもカッターマットもノリもトレペも鉄定規も、綺麗サツパリ、デスクから消えた。

写植屋さんも版下屋さんも絶滅した。カメラマンさんは撮影技術だけでは満足されなくなり、パソコンの修正技術までが求められるようになった。

営業は出会いの大海へと漕ぎだす船

「営業職全般に言えることだろうが、フリーペーパーの営業とは出逢いの大海に漕ぎ出す船だ。私たちは好奇心の赴くまま、様々な業界に漕ぎ出して行った。

飲食業界、美容業界、健康業界、冠婚葬祭業界、ファッション業界、教育業界、金融業界、不動産業界、家具家電業界、ペット業界、酒類業界、IT業界、旅行業界、レジャー業界、イベント業界、占術業界、福祉業界、官公庁…それぞれの業界が、これまた広くて深い。

飲食業界であれば、和食店・洋食店・中華料理店・韓国料理店・エスニック料理店・テザートシヨック・フアーストフード店などに広がり、そこから〈和食店〉に絞れば、鍋料理店・懐石料理店・会席料理店・寿司屋・てんぷら屋・居酒屋・うなぎ料理屋・うどん蕎麦屋などに広がる。さらに〈鍋料理店〉に絞れば、ぶく鍋店・カニ鍋店・水炊き店・すき焼き店・寄せ鍋店・ちゃんこ鍋店・もつ鍋店…と果てしない。

美容業界にしても、サロン、美容外科、サプリメント、フィットネス、化粧品メーカーなどに広がり、そこから〈サロン〉に絞れば、脱毛サロン・ヘアサロン・発毛育毛サロン・小顔サロン・美肌サロン・痩身サロン・岩盤浴サロン・豊胸サロン・矯正サロン・日焼けサロン・加圧サロン・ネイルサロン・まつ毛エクステサロン・フットケアサロン…やはり果てしない。

健康業界しかり、冠婚葬祭業界しかり、ファッション業界しかり、教育業界しかり、金融業界しかり、不動産業界しかり、家具家電業界しかり、酒類業界しかり、IT業界しかり、レジャー業界しかり、イベント業界しかり、福祉業界しかり、官公庁しかりである。

再会の喜び？

まずはアポイントを頂く。

「ガリヤです。お勧めしたい企画があるんですが、ご案内にうかがってよろしいでしょうか？」

○月△日◇時と訪問日が決まれば企画提案への流れになる。

——どんな人に会えるんだろう？——

いつもワクワクしていた。ビジネスであれ出会いはいは出会い。交渉不成立でも茶道的には「二期一会」。仏教的には「袖すり合うも多生の縁」…今生での再会だ。

時にはツワモノにあたって粉々になることも。ツワモノ…と言えば、まず浮かぶのが中井紀夫さんだ。気を許すと一刀両断のもと切り捨てられる。

エルフ時代の出会いから三十年近くになるが、当時はゴルフ場、ホテル、飲食店、海外ビックアーチストのコンサート主催など幅広い経営で注目されていた。ところが訪れるたびに社員が入れ替わる。

——♡◇さんは？——

「退職しました」

——それは困りますね——

また何日か経つと

——♡△さんは？——

…退職しました」

そのうち隠せなくなつたのか、

「…中井社長からクビにされて…」

—クビ—？—

「はい…中井社長は、チョット何かあると…解雇します」

—…かわいそう…—

出入り禁止

社員たちからそつした声がある反面、中井社長は面白かつた。並外れた頭の回転でしつかり笑いもとる。すっかり気を許していたら事件勃発。

「おたくの納期つて、いったいどうなってるんですか？！『チラシが未だ届かない』て、中井社長がたいへん怒つておられます！—」

青天の霹靂…寝耳に水。

—三日前、きちんとお届けしました！—

「…え…誰が…受け取りましたか？」

テンションの急降下を感じた。納品に居合わせた社員は3〜4名。ここで事実を伝えれば怒りが彼らにシフトする…そして、チョットのミスが…

—すみません…どなたも出て来られなかつたので、置いたまま帰りました—

その日から、
「エフルの長澤、出入り禁止！」
と、なった。

チョットのミスこそ軽んじてはいけない。大きな仕事とは小さな仕事、つまり「チョット」の集合体だ。九千九百九十九のチョットがパーフェクトでも一のチョットがNGなら命取りともなる。つまりこの「チョット」に対してどれほど真剣に向き合おうかにビジネスはかかっている。チョットのミスを隠匿した私の出入り禁止は、正当だった。

シフォンケーキ店で営業再開

先の話には続編がある。とある喫茶店でシフォンケーキを愉しんでいたところ、奥から見覚えある顔が歩いて来た。

——お久しぶりです！——

なんと十年ぶりの中井社長だ。

「お、お長澤さんやないね。あ、んた今、な、んしようかね？」

刑期満了を確信した。

——ガリヤという広告会社をやっています！中井社長こそ何されてるんですか？！——

「今ねえ、葬儀屋さんをやっていますよ。天国社っていうんですけどね」

「ゴーン…頭の中で営業開始のゴングが鳴った。

——では広告が必要ですね。ご挨拶にうかがってよろしいですか？——

「ああ…ちようど今ね、テレビコマーシャルを作ることになってるんですよ。よかったら、おたくも案を出しますか？」

——出します！——

この頃にはフリーペーパーの他、総合広告代理店としての業務が拡大していた。

CM考査の使用禁止用語に八方塞がり

放送局の「CM審査」は厳しい。審査基準を一点でもクリアしなければ、

「放送できません、作り直してください」

となってしまう。とりわけ厳しいのが医療やサプリ、一字一句にダメ出しが入る。番組を観る限りでは何でもアリのヤリ放題だが、CMとなれば別世界らしい。

そこでとりあえず問い合わせた。

——葬儀屋さんにプレゼンするんですが、何か制作上の注意点でもあればお知らせください——

翌朝、放送局から届いたファックスに絶句した。注意事項のみビッシリと箇条書きにされたもので、微に入り細に入りダメ、ダメ、ダメ…。

たとえば「お得」「素晴らしい」「ユニーク」「便利」「頼りになる」「満足する」などの賛美表現は一切NG。さらには「お勧め!」「お急ぎください!」「今がチャンス!」「お待ちしています!」「来て!」などの勧誘表現となればNGどころかご法度の域…。

——使える言葉が無いから作りようが無いです!——
と泣きついた。すると、

「風景みたいなイメージ画像を背景にして、会社名のロゴがかぶってくるような感じで作られたらいいんじゃないですか?」

呆れたことに精一杯のアドバイスが、ソレだった。

つまらんCMにお金を賭けさせる価値は無い…出鼻から八方塞がりとなって、帰路の車窓からボクと夜景を眺めていた…と、その時だった。

——NGワードの反意語ならGワードでしょ。反意語だったら使えるでしょ——

アイデアの光臨

どうもアイデアというのは、考えて悩んで迷ってヒネクリ出すものではないらしい。大事なものはその後だ。頭の中に詰まった〈思考〉などのゴチャゴチャが去り、空っぽになったとき初めて、「やっと私の居場所が出来たよっだね」と、光臨してくださる。

しかし、そう難しいことではなかった。NGワードの反意語がGワードであるように、局から具体的に示されたNGワードの反意語なら使用自由！「行こう」がNGだから「行かない！」はG。「急げ」がNGだから「まだまだ」はG。「ゆっくり」はG…「まだまだ 行かない 天国社」…これで決まった。

ただし、この言葉に命を吹き込めるのは若者や働き盛りではない。高齢者、それも社会との関わりに意欲的で向上心を保ち続けるお方。そんなお方が

「まだまだ〜！」

と画面いっぱい笑顔で言ってくたされば、

「自分も頑張らなくちゃ。ご高齢の方だってこんなに素敵に生きてらっしゃるんだから」

となつてみくんはひつくるめて元気になる。車中、おおかたのプロットが出来上がっていた。

さらなる壁は出演者だったか、

「義母が今、新天町のおいしギャラリーで個展していますので、よかつたら鑑に行かれませんか？」
杉野カメラマンから招待状が手渡されたのは料理撮影の合間だった。

——お義母さま、お幾つですか？——

「え〜と…81だったかな、82だったかな…」

その足で個展会場に駆け込んだ。赤星信子さん…作品はピカソより難解だったが、

——ツーショット写真、お願いしていいですか？——

「いいですよ〜」

——この向きでもう1枚お願いします！——

「いいですよ〜」

熱烈なファンと思わせた。

スピード現象して絵コンテ制作にとりかかった。出演承諾無しの見切り発車だが、頼み落とした拳
句にコンペ落ちして、

「ダメでした」

なんて、断る失礼だけは避けたかった。

サウンド危機

翌日、中井社長（現中井会長）から電話が入った。

「プランのほうは、どんなふうですか？」

「ほほ、出来てますー——」

「じゃさっそくですがねえ、来週火曜日にプランを見せてもらいにそちらまで行きますよ」

「はい、お待ち致します——」

「その時に、サウンドのほうも一緒に聴かせてくださいね」

「はっ？……はいっ——」

「ぜんっぜん、できてなかった。」

福岡がダメなら佐賀がある！スピリッツがいる！

サウンドの重要さは身を持って体験している。

「伊東に行くならハトヤ、電話はヨイフロ。伊東で一番ハトヤ、電話はヨイフロ」

幼い頃耳にしたCMサウンドだが、いまだ鮮烈に残っている。福岡ならたとえば、

「アイラ〜ブラブ愛眼 目とメガネとコンタクト 愛眼、ビルは瞳のデパート」

一度刷り込まれたCMサウンドは生涯消えない。すなわち、百年の広告力を与え得るのだ。

ところが、アテにしていたスタジオから断りが入った。

「火曜日迄なんて絶対無理です！せめて十日はください！」

アッチコッチのスタジオに問い合わせるも、いずこも同様。またしても八方が塞がった。

「サウンドは製作中ということで…プランだけのご提案でいきましょう」
頼りの瀬川制作部長も諦めモード…。

———そうですか…仕方ないですね……—

…と、諦めていたら…また降りてきた。

———福岡がダメなら佐賀がある。木原慶吾&スピリッツが居る……—

藁にもすがる思いで受話器をとった。

———葬儀屋さんのCMサウンドなんですけどね、『まだまだいかない天国社』っていうフレーズを必ず入れて十五秒のデモテープを作って欲しいんです——

「わかりました。納期は？」

———来週の火曜日の午前中迄にはガリヤに届くようにしてください……—

———え……—

時すでに金曜日、しかも、夜だった。

デモテープは月曜日に届いた。ご丁寧に、ロックンロールバージョン、レゲエバージョン、ド演歌バージョン、爽やかバージョン、歌謡曲バージョンと五タイプも！

押しはロックンロールバージョンですが…選んでは頂けないでしょう。クライアントって結局は無難なものを選びますからね。爽やかバージョンもしくは歌謡曲バージョンで決まるでしょう——ところがこれが選ばれた。何という柔らかかアタマの葬儀屋さんだ。

ノッキン ノッキン オン ザ ヘブンス ドア

まだまだ この世に アイ ラブ ユー

ノッキン ノッキン オン ザ ヘブンス ドア

まだまだ行かない 天国社

木原慶吾は後にこう言って苦笑した。

「あの時はですね…実は家内が盲腸炎で突然入院しちゃいまして、クレイマー・クレイマー状態（※妻に出て行かれた夫が残された子供たちと奮闘する映画）だったんですよ…。『やっぱり出来ません』ってお断りの電話を入れようって、実は何度も何度も思っただけですよ」

天国ならぬ地獄の苦しみから生まれたサウンドだった。

天国社のCM放送、全放送局が拒否！

ところが、ここに至ってまた八方が塞がった。なんと全放送局が放送を拒否。葬儀屋さんにはは弾けた印象に、視聴者クレームを恐れたのだろう。それも、いきなり拒否するのではなく段階があった。

「放送をお受けできるかどうか検討しているところですよ」

と期待はいちおうもたせながら、2と3日待たせ、

「申し訳ありません。検討したんですが…見送りということになりまして…」

——いったい何が問題なんですか?——

「…そうなんですよねえ…」

と口を濁すばかり。

——理由が解りません! 考査にひっかかる文言は一言一句無いはずですよ! 画像も非常に真面目なものです! もう一度、検討してください!——

「解りました。もう一度、検討します」

ところが、

「やはり上の者がですねえ…」

どの局もこの局も一向にラチがあかない。

——もう一度検討してください!——

「…わかりました…もう一度検討します」

放送するつもりが無いことにはどうに気づいていたが、引くわけにはいかない。そして、

——前向きに検討してください!——

と念を押し、

「はい、前向きに検討します」

と電話を切られた時…やっつと、降りて来た。

——騙されてしまえ！——

つまり〈前向きに検討する〉という柔らかな断り文句を、言葉とおりに受け取るというアイデアだ。

〈前向きに検討〉⇨〈放送ほぼOK〉。〈他局が放送すれば自局も放送〉…その習性を利用した。

——おたくのお返事は未だですか？RKBさんは大丈夫のようですよ——

「え…RKBさん…OKしたんですか？！」

——はい、そのようですよ——

「じゃ、もう一度上司にかけあってみます！チョットお待ちください！

初めて、ホントウに、前向きになった。

こうしてグルグルグルグルやっていたらFBS以外はなんとかOKとなり、翌月には予定どおり、

天国社のCM放送がスタートした。

やがて15秒サウンドをサビとした曲が作られ、それをBGMによさこいソーラン祭りに端を發するダンスチーム「BBC元氣ツス」が今も全国で踊り続けている。一度〈ふくこいアジア祭り〉でのパフォーマンスを見学したが、ほとんどスタンディングオベーションだった。

最高齢ダンサーのみっちゃんはCM撮影時すでに九十代…しかし赤星さんを含め、精一杯の元氣と笑顔を放ってくださいった皆さんは今、どうされているだろう…。

このCMは当初の狙いどおり視聴者に好意的に受け取られ、十年を越えるシリーズとなった。フジテレビの《CM大賞》では地方CM部門のグランプリ受賞。またほぼ毎年、テレビ局が全国ネットの話題にとりあげてくれた。

件の中井社長（現在は会長）であるが、お歳のせいか最近は丸くなられたようで、素晴らしいスタッフたちに囲まれ常時ニコヤカにされている。

ゴッド・マザーの退職

〈見てコンガリヤ（KBC）〉でスタートしたテレビ番組は〈ガリヤナイト（TVQ）〉にシフトして10年続いた。藤永さん、田代さん、ネネさん、宇佐元さん…ナビゲーターもかなり代替わりしたが、いずれも素敵な仲間たちだった。

だが誌面と番組制作の狭間で担当の瀬川さんはクタクタだった。喫茶店に誘つと、

「社長…実は…」

「……………（きたっっ！）——」

私のセンサーは辞意を瞬時にキャッチする。

「…そろそろおいとましようと思つんですが…」

ハフエの味がしなくなった。

染色アートの独自の世界を拓く母親の跡を継ぎたいとかいちおうの退職理由はあったが、エルフ時代、そしてガリヤでの十年は充分過ぎるほどの長旅だったようだ。

——貴女はガリヤの名付け親ですよ、ガリヤのゴッドマザーですよ、母親が子供を捨てるの？——

「……………」

ま、子供が勝手気ままにやっついていればマザーの役目も果たしたということか、説得力ゼロ。これにてエルフを飛び出した創業仲間の最後の一人が、去ることとなった。時まさに極寒の中で約束した、自社ビル建立のまっ最中だった。

天使のコスチューム

創業仲間と言うなら……実は、もう一人いた。玲子さんだ。どこで噂を聞きつけたのか、「今度こそ、ついに行きますー！」

アパートの冷えた畳に正座すると、深々と頭を下げた。

ちなみに「ついて行けなくなつた」の一回目は、エルフ誌面が「広告だらけ」となつた直後だつた。「こんな仕事、やってられません！」

と一人が叫んで翌日から皆消えたという、〈私……独りになつちやつた事件〉の火付け人だ。

二度目の「ついて行けなくなつた」はごくプライベートな理由だったが、三度目ともなるとアップパシだった。創業時の仲間たちを最後の一人までしっかり見送り、自社ビル建立を見届けてからの退職である。褒めて感謝して見送つた。

ところで彼女の能力は、経理や人事などの本業よりむしろ別方面で発揮された。撮影時はモデルさんのフェイスメイク・ヘアメイクから衣装制作・小道具制作といった裏方仕事に長け、

——お願い、作つて！——
と頼めばたいいてい翌朝には揃つていた。

そんな彼女の最後の裏方仕事が天使のコスチューム制作だ。背中に白い大きな羽をつけたシンブルな白サテンのロングドレスで、とても美しい仕上がりだった。その納品先は赤坂けやき通りのパラダイス・カフェ。冬野正博氏が再起を賭けた店だった。

伝説のディスコ

冬野氏と言えば、マリアクラブ：ディスコブームの金字塔とも言える2千人収容の巨大ディスコだ。入店時には厳しいフアッションチェックまであり、私たちはパーティーに出るような気構えで臨んだ。飲んで食べて踊って時を忘れた。青い影やメリージェーンは閉店を告げるいわば蛍の光。待ちに待ったチークタイムでありメイクカプルの応援歌だった。

冬野氏率いる冬野観光は、伝説のディスコ・マリアクラブの他、ベルサイユパレス、ブックスマリア、伊太利亜館、おしゃれなアダムたち、遊膳亭、イマジン、ハリウッドパーティー、極楽食堂、ソーホー、亜細亜屋台市場、曼荼羅などの斬新な店舗を次々とオープンし、親不孝通りのかなりのスペースを占めていった。

しかし時まさにバブル。親不孝通りの土地価は福岡でも最高値にまで膨らみ、そして弾けた。直撃をくらった冬野観光は、巨像が倒れるようにして果てた。

911の夜のこと

パラダイス・カフェにも、冬野氏ならではの「先取り」は随所に感じられた。癒しに溢れるソファやカッブルシート。中でも目を引いたのは、ガラステーブルに敷き詰められた、真紅のバラだ。

「このバラはずっと枯れないんですよ」

ブリザーブドフラワーというのを、この店で、初めて識った。

バーカウンターで飲んでみると、一息ついた冬野氏が隣席に座った。

「親不孝通りの土地を欲で買い漁っていたように言われてますけどね…本当はぜんぜん違っんですよ」
寡黙な方ながら、お酒が進むうち饒舌になった。

——…本当は？——

「きちんと商売していくには銀行の信用が大事です。でも僕らのような飲食店がいくらいい店を作っても、いくら繁盛させても、店舗だけでは銀行の信用は得られません。銀行の信用が得られなければ従業員たちに未来を作ってやる事ができません。どうしても土地を持つしかなかったんです…」
従業員たちに未来を作ってやる…その言葉を受け止めるだけで、当時の私は精一杯だった。

不思議な時代だった。追いついてるような勢いに、日本中が振り回されていた。

「八百万で売り出したマンスションが三千万になってた！」

「勧められた時に買ったときゃよかった」

「無理をしてでも今のうち購入しなくちゃ！来年はさらに高騰するから」
こんな会話が日常的に飛び交っていた。

折しも壁のモニターが不思議な映像を映し始めた。高層ビルに飛行機が追突し、やがて崩壊…：2001年9月11日だった。

バラダイス・カフェは、それから二年ほどで消えた。しかし記憶のフィールドに目を移せば、マリアクラブも、親不孝通りを賑わせた様々な店たちも、そして人々も：ブリザーブドされたバラごとく、鮮やかだ。

ガリヤ社員はタレントさん？

創業社員たちは十年でほぼ全員が去り、その間にも多くの入退社があった。三日で消えた者までカウントすれば延べ二百名を超える。集合写真はさながらAKB(笑)、社内の雰囲気もそれに近かった。びっくりするほどキレイなこは普通に居たし、仲間意識にライバル意識が交錯し、泣いて笑って喧嘩して一生懸命仕事して恋もして、

「卒業しまゝすー！」

のノリで退職した。同期や仲良しが退職となれば、

「私も…」

「すみません、私も…」

連鎖反応だ。

「彼女は結婚退職だけど貴女には未だ彼氏も居なかったでしょ？どうして退職？」

「東京に出ることにしました」

「留学しようと思ひまして」

「祖母の介護で…」

こんなだから送別会はたいてい合同だった。業者さんたちも花束持参で駆けつけた。

ある時、株式上場のサポートを業務とする会社の訪問があった。質問だけで切り上げられ、一上場のお勧めじゃなかったんですか？

「…いや、こちらは…無理でしょう」

理由を尋ねると

「…広告業というのはやはり…タレント業ですからね」
妙に納得する自分がいた。

分岐点

しかし、大量の退職者を出し続けながらもガリヤが安泰でいられたのは、二重社員の安定確保に他ならいだろう。退職者たちが残す仕事の受け皿となり、その余力がまた新たな戦力を生み出してくれた。

「営業編集部」では「ガリヤ」の他にも一般家庭対象に「ガリヤプラス」を創刊。「営業推進部」では総合広告代理店業務が活気を見せ、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌・チラシ・看板など、ひととおりの広告業務をこなすようになっていた。

「ネット事業部」も早い時期から動き出した。高価なサーバーを買い込み、九州大学から毎月講師を招いて研修会を行うなど経費と期待はかけたものの、その重要性に世間が気づくには、まだ年月があまりすぎた。

そして2004年。ガリヤはこの年を分岐点に、ある出来事をきっかけとして、長い長い下り坂を、
コロコロコロコロ転がり続けることとなる。

四章につづく(8月12日アップ)